マクベスの意識構造

——「運命」「眠り」「時」——

小野　昌

Shakespeare の戯曲の中で，最も短い作品の1つである *Macbeth* は，plot の面からみても最も単純な作品と言えるであろう。「事件」と言える事件は，主人公 Macbeth の Duncan 殺害のみであると考えられる。それ以後のできごとは Macbeth にとっては言わば，ことのなりゆきに過ぎない。それでは彼はなぜこのような事件を引き起こしたのだろうか。Lady Macheth 以外にはだれからも認められず，自分自身でさえ認めることができず，考えただけで身の毛のよだつこの国王殺しという犯罪を，彼はどのようにしてやってのけることが出来たのであろうか。例によって Shakespeare は殺害の動機などを主人公の口から詳細に語らせたりはしないし，初期の史劇の Richard Ⅲ のように，I am determined to prove a villain. などと言わせはしない。そこで主人公の「運命」とのかかわりあい方を考えることによって，彼の国王殺しの論理を探り，彼の行為の裏にある特異な意識構造を検討することによって，Macbeth という男の悲劇のありようを考えてみることにしたい。

I

Wilson Knight は，この作品は他のどの Shakespere の作品よりも疑問が発せられることの多いことを指摘しているが[1]，確かに1幕1場1行目の魔女の台詞に question mark が付くことに始まって，重要な台詞に question mark が付くことが多い。それは Macbeth の心の中の不安を表し，また登場人物それぞれが，お互を信頼できない状況を示しているのだが，やはり何んと言って

も最大の question mark は，なぜ Macbeth は Duncan を殺すことができたか，ではないであろうか。

反乱を鎮圧し，武功をたてた「勇敢」な Macbeth が，下剋上の時代の Scotland において，王になってみたいと，ふと思ったとしても，それは不思議なことではないであろう。けれども，すべての行為がそうであるように，考えることと，それを実際に実行に移すことの間には大きな距離があるであろう。特に人間の，Macbeth の場合のように国王の生命に関する場合には。それでは彼はどうしてこの距離を無くすことができたのか。このことを考えるためには彼と魔女との関係を考えてみなければならない。

遠征から帰る途中の Macbeth と Banquo を3人の魔女達がヒースの茂る原野で待ちうけている。彼等が Macbeth の前に姿を見せるためには，両者の間に何らかのつながりがなければならない。彼等は Macbeth の心の中の何かを，すでに察知している。そうでなければ魔女は彼の前に現れることはない。Macbeth の最初の台詞，So foul and fair a day I have not seen. (I, iii, 38) はしばしば指摘されるように，魔女の fair is foul and foul is fair との echo があることは確実であろう。彼はすでに魔女の世界に足をふみ込んでいるのである。そこで，第3の魔女の予言，All hail, Macbeth! that shall be king hereafter. (I, iii, 50) に自分の心中を見抜かれて，Banquo には fair に思える予言に，「驚き」，「恐れ」，そして「呆然」としてしまうのである。

A. C. Bradley[2] は従来考えられてきた魔女に対する代表的な2つの見解，つまり，魔女は Macbeth が抵抗することのできない女神であるとか，あるいは運命の神であるという説，そしてもう1つ，魔女は彼自身の無意識的，または，半意識的罪悪を象徴的に表現するものである，という説に反対して次のように述べている。

> The words of the Witches are fatal to the hero only because there is in him something which leaps into light at the sound of them; but they are at the same time the witness of forces which never cease to work in the world around him, and, on the instant of his surrender to them, entangle him inextricably in the

web of Fate[3].

つまり Macbeth にとって魔女は，ハッキリと外的な存在でもなければ，内的な存在でもない。彼は彼等のことばに，自分の心の中の何かを，彼の野心をズバリ言い当てられた。そして彼自身がそれを紛れもなく自分のものであると確認してしまった。これこそが自分の宿命なのだと Macbeth が認めてしまったのではないだろうか。いわば両者の間には，共犯の関係が成立していると言える。そしてさらに，3つの予言のうち，2つまでが実現したとなると，彼のこの認識は増々強固なものになって行く。さらに注目すべきは，Lady Macbeth はこの予言に『超自然の助け』をみていることである。

Which fate and metaphysical aid doth seem
To have thee crowned withal. (I. v. 27-28)

さて，自己の運命を予知してしまったと思った人間にとって，考えられる態度は3つあると思われる。

① ひたすらじっと傍観し，自己の運命にまかせる。
② 運命に挑戦し，最後まで戦う。
③ 知り得た運命に従がって生きるべく，行動を起こす。

①の態度については Macbeth も，一応考えてみる。

If chance will have me king, why, chance may crown me,
without my stir. (I. iii. 143-144)

Duncan を殺している自分を想像し，その余りの恐ろしさに耐えかねて，行動を起こさなくても王になれるかもしれないと考える。けれどもこれは，Lady Macbeth によってもろくも潰されてしまう。②の態度こそ，それこそ Macbeth

には全く無縁のものであると言える。彼は運命と渡り合うべき理念などは持ち合わせてはいないのである。Hamlet にとっては，自己の理念をどのような行為に託したら良いのか，それが正に『問題』であった。従がって，その託すべき行為が見つからず，優柔不断な，行動的でない態度しか取れず，自己の理念とは無関係と思われるところでは，急に行動的になって，思わず Polonius を刺し殺してしまう。さらに彼にとっては自分の生き方を決定ずけてしまうことになる，父親の亡霊さえも，懐疑の対象となっている。

The spirit that I have seen
May be the devil: and the devil hath power
To assume a pleasing shape: yea, and perhaps
Out of my weakness and my melancholy,
As he is very potent with such spirits,
Abuses me to damn me.

(*Hamlet* II. ii. 627-632)

そして与えられた運命そのものが彼の苦悩となるのだが，Macbeth はその問題で悩むことはない。Hamlet にとっての大問題を全く問題にせず，飛び越えたところから，Macbeth の新たな問題が始まるのだと言える。To be, or not to be は，魔女の fair is foul にとって換わられて，To be=not to be という非論理が支配しているのである。

魔女の予言を運命と感じ，そこに超自然の援助をみている Macbeth は，その示された運命を実現すべく行動を開始する。Duncan を殺し，自分が国王になることが自分の運命ならば，それに従って行動するのが当然である，という論理が彼の中に成立している。どう考えても恐ろしくて実行できないような重大な殺人を，Lady Macbeth の援助があったとは言え，なんとかやり通すことができた理由はそこにあるのではないであろうか。

魔女達を『人間の知力以上のものを持ちあわせている』[4] と考え，さらに彼等に『運命と超自然の助け』をみることによって，やっとのことで彼はこの犯罪をやり遂げる。しかし Macbeth は安心することはできない。魔女によれば，

Banquo は，彼自身，王になることはないが，子孫が王になることになっているからである。

To be thus is nothing,
But to be safely thus: our fears in Banquo
Stick deep, and in his royalty of nature
Reigns that which would be feared.
(III. i. 47-50)

ここにもまだ，To be＝nothing という魔女の非論理が，がっちりと Macbeth をつかんでいる。そしてこれ以降の人生は，他人を殺すことが自分が生きることになってくる。彼が殺しを続けている間は少なくとも生きていられることになるのである。Banquo を殺すことには成功するけれども，息子の Fleance には逃げられてしまう。より重要な人物を取り逃がしてしまった Macbeth の前に Banquo の亡霊が現れる。

Blood hath been shed ere
now, i'th'olden time,
Ere humane statute purged the gentle weal;
Ay, and since too, murders have been performed.
Too terrible for the ear: the time has been,
That, when the brains were out, the man would die,
And there an end: but now they rise again,
With twenty mortal murders on their crowns,
And push us from our stools...This is more strange
Than such a murder is. (III. iv. 75-83)

ここで Macbeth の恐怖は最高点に達する。なぜか。王である自分の地位を脅かしそうな人間を殺すことによってしか自分が生き残る術を無くしてしまった彼には，死んだ人間が，立ち上がって，自分を椅子から押しのけるとなると，一体彼はどうしたら良いのであろうか。居並ぶ諸侯達に不審に思われまいとする Lady Macbeth の懸命の演技にもかかわらず，どうしても Macbeth が恐怖

心を押え切れずに，王としての見栄も外聞もかなぐり捨てて，はしなくも心の底を見せてしまう理由はここにあるのではなかろうか。そしてこの亡霊は，諸侯達には無論のこと，夫人にも見えないことは，彼の孤独感を一層強めることになるのである。そこでさらに運命の強力な保証を得ようとして，彼は今度は自分の方から魔女達の所へ出向いて行く。

I will to-morrow
(And betimes I will) to the Weird Sisters:
More shall they speak; for now I am bent to know,
By the worst means, the worst. (III. iv. 132–135)

その後に続く，3幕5場は魔女の女王とも言うべき Hecate が3人の魔女達をしかりつける短い場面であるが，Macbeth が求めてやまない security をはっきりと示している。彼が頼りにしている，『超自然の援助』の実体は次のようなものだったのである。

And that distilled by magic sleights
Shall raise such artificial sprites
As by the strength of their illusion
Shall draw him on to his confusion.
He shall spurn fate, scorn death, and fear
His hopes' bove wisdom, grace, and fear:
And you all know security
Is mortals' chiefest enemy.
(III. v. 26–33)

これこそが，Macbeth の運命の実体であったのである。けれども彼はこれを聞いていない。4幕1場。Hecate は退場し，魔女は彼を待ちうけている。そこで彼は確実と思われる保証を得ることができた。Macduff に気をつけること。Macbeth は女から産まれた人からは害されないこと。そして，Birnum の森が彼をめがけて動くまでは滅びることはないこと。この予言自体，矛盾している

のだが，そしてそれこそが魔女達のねらいであるのだが，Macbethは安心して言うことができる。That will never be. と。現実の世界に存在し得ないもの，そして，実際には起こり得ないものに，彼は自己の存在をかけている。そうした空虚なものに自己の存在基盤をすえていながら，それを現実の世界で受けとめている限り，彼は安心していることができる。従がって，この予言自体，全く無意味なものであるのだけれど，Macbethはそれを信じ切って，あるいは，信じなければ生きられない，というべきであろうか，現実の行動を起こしていく。そこでこれ以後，彼の取る行動は，すべて意味の無い行動になり，限りなく無意味な殺戮を，いやになるほどくり返すことになるのである。

From this moment
The very firstlings of my heart shall be
The firstlings of my hand. And even now
To crown my thoughts with acts, be it thought and done:
The castle of Macduff I will surprise,
Seize upon Fife, give to th'edge o'th'sword
His wife, his babes, and all unfortunate souls
That trace him in his line. No boasting like a fool;
This deed I'll do before this purpose cool.
(IV. i. 146-154)

彼にとってのactsは殺人以外にはないのである。殺すことが自己目的と化し，Lady Macduffも，その息子達も，その一族も，正にMacbeth自身が言うようにunfortunateな，そして無意味な死をむかえるのである。彼は殺すことに快楽を見い出すような，いわゆる殺人鬼ではない。Jan Kottの言うように，殺人をことごとく終らせる最後の殺人を夢みているのである[5]。Duncanを殺す時もそうであった。彼は喜々としてそれを実行したのではなかった。恐怖をやっとのことでこらえて，Lady Macbethに助けられながらやり遂げたのであった。そういう自己を，彼自身が受け入れることができない。だから，Duncanの死んでいるのが発見された直後，彼がgrace is dead (II. iii. 93) と言って

も，それは必ずしも彼の演技であるとは言えないのである[6]。だからといって，ローマ人のように自殺することもせず，魔女の予言に一縷の望みをいだいて，ひたすら恐怖からのがれるべく，無意味な殺人をくり返すのである。

けれども Macbeth が破壊してしまった秩序が回復してくる。4幕3場，今まで，互の心の内を計りかねていた Malcolm と Macduff は，黒い疑惑を拭い去って，団結して立ち上がるのである。Macbeth によってひきおこされた国中の混乱は，反 Macbeth という形をとって，終結されることになるのである。

Macbeth にも，やっと真実を知る時がやってくる。引き返すことが，進むこと以上に億劫になり，行動の面では若輩にすぎないと嘆いていた彼も，悪においては十分に成長しきっている。Macbeth is ripe for shaking. (IV. iii. 248)。そして，恐怖の味を忘れてしまうほどになっている。I have almost forgot the taste of fears. (V. v. 9) 彼の運命を支えてきた，Lady Macbeth の死が伝えられる。Birnam の森が Dunsinane に向かって動き出す。

> I pall in resolution, and begin
> To doubt the equivocation of the fiend
> That lies like truth. (V. v. 42–44)

魔女達のことばを予言だと思ったが，実はそれは half-truth の equivocation であったのだ。そのことにやっと気付きながらも，彼は最後まで予言にすがろうとする。真実に直面することをどこまでも回避しようとするのである。今や望むことは全世界を死出の旅の道連れにすることなのである。

> I'gin to be aweary of the sun,
> And wish th'estate o'th' world were now undone.
> (V. v. 49–50)

Macduff が帝王切開で産まれたことがわかる。Macbeth が fair であると思って信じた予言は foul であった。彼は自己の運命に忠実に生きたかったのである。だから恐怖におののきながらも，懸命に自分に与えられたと思った運命

を気が狂うこともなく，自殺することもせずに生き通した。それが彼の生き方なのであり，美意識であったと言えよう。だから結果として foul で終わったとしても彼は誰をうらむでもなければ，後悔も，反省も，弁解もしない。まして Hamlet のように後世に伝えておいてもらいたいことなどありはしないのである。存るものは唯，人生に何の意味も感じられず，全く孤独な死をむかえるのである。彼にはその他の生き方はできないのである。

戦闘で始まり，戦闘で終った一生であった。けれど彼の最も恐ろしかった戦は，illusion との戦であったのではないであろうか。敵は彼の外側にいたのではなく，彼の意識の内部にいたのではなかったか。だから彼の行動は戦いではなく，あがきであったのかもしれない[7]。そして彼がいかに行動的にみえようと，それは action ではなく，運命に対する reaction だった。彼の行為そのものは何人も，Macbeth 自身も認めることはできない。もし，彼と共感できる部分があるとすれば，それは彼の意識のあり方の中にしか見出せないのではないであろうか。そういう立場をとらない限り，この劇はその plot と同様に単純な勧善懲悪の道徳劇で終わってしまうのである。彼の魂は最初から最後まで開放されることは全くない。彼の意識は自己の内部へ内部へと，それこそ限りなく降りてゆき，それは夢の領域にまで達するのである。

II

Macbeth の行動を支えているものは，非論理の論理であり，fair＝foul で，foul＝fair であり，nothing is but what is not の論理である。こうした論理に翻弄されて，結局，破局をむかえるのであるが，このような，現実の世界では通用しない論理が reality を持ち得る世界，それが夢という領域ではないだろうか。夢を見ている本人自身にとっては，それが現実の世界で起こっている場合よりも，何倍も増幅された感情になり得るし，ずっと real な世界であると言える。そこでは現実の論理も，時間の経過も全く超越している。Macbeth の意識の中をみていくと，われわれは彼の住む世界はこのような世界であると考えることができる。眠りと，夢という関連からみても，この劇の 'key-word' が

'sleep' であるとする Clemen の指摘はうなずける[8]。Macbeth は眠っている Duncan を殺した。けれども殺す前からはっきりと悪夢が眠りを殺すことを感じている。

Now o'er the one half-world
Nature seems dead, and wicked dreams abuse
The curtained sleep. (II. ii. 9-51)

しかし，Macbeth と同じ予言を聞き，王にはならぬが，子供が王になると言われた Banquo は悪夢を恐れて，眠るまいとしている。眠りに関しても，この2人の違いは，決定的である。

There's husbandry in heaven,
Their candles are all out.....
A heavy summons lies like lead upon me,
And yet I would not sleep. Merciful powers,
Restrain in me the cursed thoughts that nature
Gives way to repose! (II. i. 4-9)

夢の中でも Macbeth の意識は冴えている。そして自分のしてしまった行為の結果までも了解している。ここで彼は自然と和解する道を自らの手で閉ざし，自分の犯した罪を忘れることもできず，その恐怖からのがれようと，罪を重ねてゆくことになるのである。彼の意識は，あたかも不眠症の患者が，眠りながら自分が眠れなくなる夢を見ているようなものではないだろうか。そのような彼の苦悩を，Lady Macbeth は決して理解することはできない。

Macbeth. Methought I heard a voice cry 'Sleep no more!
Macbeth does murder sleep'——the innocent sleep,
Sleep that knits up the ravelled sleave of care,
The death of each day's life, sore labour's bath
Balm of hurt minds, great nature's second course,

Chief nourisher in life's feast,——
Lady M. What do you mean?
(II. ii. 35-41)

Lady Macbeth には夫の言うことが理解できず，彼の苦悩もわからないのであるが，結果としてはやがて彼女も眠りを殺され，夢遊病者となって，夫と同じように手に付いた血を，アラビアの香水を使っても流い落とすことができないと感じ，fancies に苦しめられながら死んでしまうのである。Macbeth は imagination に苦しめられながらも，逆にそれによって強くなっていくのであるが，Lady Macbeth は全く逆の過程を進むのである[9]。Macbeth の意識は初めから，この妻の夢遊病者の意識であったのではないだろうか。眠りを殺されて苦しむ2人ではあるが，この劇の出だしで，Shakespeare はすでにこのことを魔女達に語らせている。

Sleep shall, neither night nor day
Hang upon his pent-house lid.
(I. iii. 19-20)

最初から，彼等は，あるいは Shakespeare はというべきか，周到な準備をしていたのである。この劇の重要な場面がほとんど夜の場面であることも，この「眠り」のテーマと無関係ではない。Macbeth は 'Stars, hide your fires!' (I. iv. 50) とよびかけ，Lady Macbeth は 'Come, thick night' (I. v. 49) と叫ぶ。こうして明りを消された闇の中で次々に，人殺しが実行される訳なのだが，彼等の nightmare の意識も増々ふくれあがってゆく。そしてそれは Scotland の国全体に拡大し，人々を nightmare の状況に引きずり込み，uncertain で doubtful で unnatural な状態が続くのであるが，Malcolm の言うように，'The night is long that never finds the day.' (IV. iii. 240) であって，やがて，夜明けの太陽がさし始める。Lady Macbeth は地獄の暗さにおびえ，'Hell is murky' (V. i. 35) と感じながら死に，Macbeth は太陽を見るのがいやになってくる。'I'gin to

be aweary of the sun.' そして，Macbeth の死によって，nightmare は終りを告げ，再び nature が回復するのである。

Ⅲ

Macbeth のこのような意識構造にあっては，時間の経過はどのようになるのであろうか。彼は魔女によって，「現在」と「未来」とを告げられる。この告げられた現在，つまり Cowder の領主になっていることを彼はまだ知らなかった。ここに彼が魔女のことばを予言として信じてしまう発端がある。そこで彼は，過去・現在・未来と進む自然な時の経過を無視して，独自の時を構築しようとするのである。時計の針の回転を大幅に速めてしまう。

Duncan. Thou art so far before,
That swiftest wing of recompense is slow
To overtake thee. (I. iv. 16–18)

さらに，Macbeth の帰りを待ちながら，彼の手紙を読んでいる Lady Macbeth は現在をとび越えて，未来を感じてしまう。

Thy letters have transported me beyond
This ignorant present, and I feel now
The furure in the instant. (I. v. 55–57)

Macbeth もこの一撃で，すべてに終止符を打てるものなら，来世を賭しても良いと考える。

But here, upon this bank and shoal of time,
We'ld jump the life to come. (I. vi. 6–7)

けれども，そのような自然な時の流れを変えることなど出来はしないとは彼自身よくわかっているのである。そこで彼は大いに迷うのだが，Lady Macbeth

にはそんなことは理解できない。'unsex me here' (I. v. 40) と，女で無くなった彼女の unnatural な状態は，少なくともこの段階では夫をはるかにしのいでいるのかもしれない。

やっとのことで Duncan を殺してみたものの彼は恐ろしくて「過去」を振り返ることができなくなってしまう。持って来てしまった剣を置きに行くことができなくなってしまう。'I am afraid to think what I have done; Look on't again I dare not.' (II. ii. 51-52) 時の自然な運行を 'seeds of time' (I. iii. 58) を破壊してしまった彼は，もはや過去の追憶にふけることは不可能になってしまった。時の回復を願うのだが，What's done cannot be undone. なのである。

Wake Duncan with thy knocking! I would thou couldst.
(II. ii. 74)

Duncan を殺してしまった瞬間に，彼には時の経過は無意味になってしまった。そこでこれからは，無意味な殺人ばかり犯すことになり，彼の人生そのものも無意味になってしまうのである。

Had I but died an hour before this chance,
I had lived a blesséd time; for from this instant
There's nothing serious in mortality.
(II. iii. 91-93)

これから時計の針の運行と，自然の運行とが一致しなくなる。Macbeth の時間は Scotland 全土に影響を及ぼし始める。暗闇が大地を覆い日の光をさえぎっている。

by th'clock 'tis day,
And yet dark night strangles the travelling lamp.
(II. iii. 6-7)

Macbeth は進むことも退くこともできないでいる。'Returning were as tedi-

ous as go o'er'. (III. iv. 138) returning (過去)=go o'er (未来) という奇妙な時が存在している。過去と未来が同時にある夢の世界の時間の存り方である。そしてあの魔女の fair=foul の論理が，ここでも働いている。けれども，自然はその力を回復し始め，Macbeth に報復を開始する。

Time, thou anticipat'st my dread exploits.

(IV. i. 4)

それにつれて，Macbeth も行動を速める。しかし「時」は Lady Macbeth を永遠の時間の中に引きずり込んでしまう。彼女の死が伝えられる。'She should have died hereafter' (V. v. 16)「彼女は hereafter (未来) に死ぬべきであった。」'There would have been a time for such a word' (V. v. 17)「もっと前 (過去) にこんな知らせがあってもよかった[11]」。彼女の死も，Macbeth の死と同じように，Duncan 殺しの後は，いつ来ても良かったのである。時の経過に意味などは，すでに無くなっていたのだから。'To-morrow, and to morrow, and to-morrow...signifing nothing' (V. v. 19–28) の台詞は，Duncan 殺しの直後の Macbeth の台詞と直結している。この間の時の経過は無意味なのであるから当然のことである。「明日，明日，明日」と Macbeth は嘆いてみるが，眠りを殺されている彼には，明日という日は遂に見ることはできなかったのである。

〔註〕

Macbeth からの引用はすべて John Dover Wilson 編の The New Shakespeare, *Macbeth* (Cambridge U.P. 1973)による。

1) G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (London: Methuen, 1971), p. 141.
2) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London: Macmillan, 1966) p. 285.
3) *Ibid.*, p. 292.
4) I. v. 2–3.
5) Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary,* (New York: Anchor Books), p. 93.
6) Cf. Ronald Watkins and Jeremy Lemmon, *In Shakespeare's Playhonse Macbeth* (London: David & Charles, 1974), p. 95.

7) See G. Wilson Knight, *op. cit.*, p. 153.

8) W. H. Clemen, *The Development of Shakespear's Imagery* (London: Methuen, 1966) p. 101.

9) Cf. Sen Gupta, *Aspects of Shekespearian Tragedy* (Calcutta: Oxford U. P., 1977) p. 87.

10) Cf. G. Wilson Knight, *The Imperial Theme* (London: Methuen, 1965) p. 150.

11) 木村俊夫、『時の観点からみたシェイクスピア劇の構造』，東京，南雲堂。p. 190. を参照。